保　存　活　用　計　画　書

景観資産の名称	緑茶のふるさと・宇治田原湯屋谷～永谷宗円生家と茶園景観～
申　　請　　者	宇治田原町湯屋谷区　区長　谷村和男

代表写真

1　位置及び範囲

【位置】

【登録範囲と範囲設定の考え方】

・永谷宗円生家と宗円の功績を祀る茶宗明神社、町内で最初に栽培が始まったとされる茶園を登録範囲とする。

2　自然、歴史、文化等からみた特性

□景観資産の魅力

・湯屋谷地区は、「青製煎茶製法」を開発したと伝えられる永谷宗円の出身地である。信楽街道から少し離れた２本の谷筋に茶問屋と茶農家が集落をなし、うち１本の最奥に永谷宗円生家と茶宗明神社がある。茶園は、現在は谷筋にはなく、大福に戦後開かれた集団茶園等で茶の栽培を行っている。

・宇治茶生産の歴史のメルクマールをなすいくつかのできごとが起こった場所であり、それらをすべて景観として今に残している点が重要である。

・第一は、「宇治田原の茶栽培発祥の地」である。大福谷の最奥部に鎌倉時代に寺院が開かれ、その周辺に茶の木が植えられたものという。現在もこの地には茶園が営まれており、うち一部は自然仕立ての手詰み茶園である。深い谷の奥に位置するため、ここは日照時間が限られている。あるいは、天然の覆下とでもいうべき環境と言え、それが宇治田原茶発祥の地の理由の一つなのかもしれない。

【自然仕立ての手詰みの風景】

・第二は、「青製煎茶製法」が開発されたことである。青製煎茶製法は、当時行われていた「蒸す・茹でる（加熱処理）・乾燥」という工程に「乾燥させる前に蒸した茶葉に熱を加えながら揉む」という過程を加えた製法で、宇治製法とも呼ばれている。当地出身の永谷宗円が長年をかけて開発したものと伝承されるこの製法により、大変美しい緑色で香りも味わいもそれまでのものとは比較にならない高品質なお茶をつくることが可能となり、日本茶は劇的に変化を遂げた。湯屋谷には、この煎茶製法の開発に関わったとされる永谷宗円の出生の地が現在に残されている。建物は近年建て替えられたものであるが、生家に設けられていた焙炉が現存する。生家跡の奥には、永谷宗円を祀る茶宗明神社が鎮座する。湯屋谷住民に加え、山城一円、そして遠く全国の茶業関係者の寄進によって建設、維持された神社であり、日本の茶業の精神的なよりどころの一つとして重要な意味を持つ。

【永谷宗円の生家】

【永谷宗円が使用していた焙炉跡】

・第三が、江戸に販路を開いたことである。これは永谷宗円が江戸の山本嘉兵衛に青製煎茶の販売を託し、評判を得たことによって、江戸に大きく販路が開かれたもので、以降、湯屋谷の茶問屋は江戸を中心とする遠方に販路を確保することとなった。湯屋谷は谷深い地で、茶園もないが、茶農家だけでなく茶問屋が軒を連ねる点、特異な集落形態といえるが、これは遠方に販路を確保したことと絡めて理解すべきことであろう。

【永谷宗円を祀る茶宗明神社】

□自然的特性

・宇治田原町は北西部の大峰山（506.4m）を中心とする山地と南端の鷲峰山（681.2m）から北東及び南西に連なる山地に囲まれている山間の盆地で、町域の７割以上を山林が占めており、標高の最も低い場所でも 80m程である。

・湯屋谷地区は、宇治田原町の南東部に位置し、鷲峰山の麓、幾筋かに分かれた谷筋に沿って集落が形作られている。「湯屋谷」の名の由来は、むかし集落内のあちこちに温泉がわき出ていたという伝承があるためで、現在も冷泉が湧き出している。文明 18（1486）年に古図を模写したという「湯屋谷温泉全図」には、数々の寺社とともに「上

之湯」などと書かれた部分が一体となった「癒しの郷」だったと言われる。
・平地は少なく、いくつかの谷筋からなる集落である。
・宇治田原の茶栽培発祥の地である大福谷は湯屋谷と奥山田の境にあり、谷の両側が険しい山林に囲まれている。谷は風が通り抜け易く、霜が降り難いため、山地の茶園では珍しい、防霜ファンを必要としない茶栽培に適した自然環境を兼ね備えた地域である。
・大福谷は宇治田原町の中でも気温が低く、寒暖の差が大きい地域である。

□歴史・文化的特性
・日本の喫茶習慣は、今から 800 年以上前に栄西禅師が中国からお茶を持ち帰り広まったといわれており、当時のお茶は茶葉を摘んで加熱処理しそのまま乾燥したもので、味も香りも粗末な煎じ茶であった。江戸時代の文元 3（1738）年、湯屋谷の永谷宗七郎義弘（宗円）は、15 年の歳月をかけて研究し、それまでよりも色、味、香りに優れた煎茶を作り出し、江戸の山本嘉兵衛（山城国宇治山本村から上京し、元禄３（1690）年に「山本山」を創業した茶商）を通じて売り出すことに成功した。宗円はその製法を惜しみなく広めたため「青製煎茶製法」は全国に広がり、現在の日本緑茶の源流となった。安永７（1778）年に 98 歳の生涯を閉じた宗円は現在「茶宗明神」として祀られ、茶祖として全国の茶業者の崇敬を集めている。
・代々の永谷家が暮らした屋敷の跡には、製茶に用いた古い焙炉跡を保存するため、昭和 35 年に地元住民の手により建てられた永谷宗円生家があり、共に町指定文化財となっている。宗円の生家は「日本緑茶発祥の地・宇治田原」を象徴する施設となっている。

３　景観の保存、育成及び創造に関する事項

□法律や条例などによる景観上の規制誘導事項
・永谷宗円生家と焙炉跡は町指定文化財に指定（昭和 49 年６月 20 日）
・茶園は農用地（農業振興地域の整備に関する法律）に指定

□景観づくりの目標像
・日本緑茶の製法を編み出した「永谷宗円生家」とその功績を祀る「茶宗明神社」、そして尾根向こうに位置する町内の茶栽培の発祥といわれる「茶園」を、日本緑茶発明のストーリーの一連として楽しめるよう景観保全を行う。

□景観づくりの取組
［現状］
・昭和 35 年に建てられた生家も年月の経過とともに茅葺屋根などの痛みが目立つようになったため、生家の修復と活用を目的に宇治田原町の茶業関係者や地元住民が中心となり永谷宗圓翁顕彰会が結成され、その活動で集められた寄付により、平成 19 年に屋根の全面葺き替え工事を行った。
・また、京都府の「地域力再生プロジェクト」の支援を受け、生家の内外装の改修や休憩用の四阿などの周辺

【生家敷地内の四阿】

環境整備を実施している。
- 生家の管理運用は、永谷宗圓翁顕彰会が担い、軽微な修復や草刈りなど周辺の環境整備、来客者対応などを行っている。
- 生家の内部は歴史資料の展示、動画閲覧、呈茶など来客者が学び憩える場として整備している。

［課題］
- 茶園をはじめ生家の管理についても、地区民の高齢化等により日々の管理を行う担い手に不安がある。
- 区全体が景観への高い意識を持ち、湯屋谷をどのような街並みにしていくべきかを検討していく必要がある。

［解決のためのアイデアや方針］
- 湯屋谷地区は従来から住んでいた住民は減少しているが、宇治田原町外からの新たな入居者は増加している。当地区の歴史・文化・誇りである宗円の功績を町外からの新たな入居者も含めた全地区民が共有することで、区全体で生家や茶宗明神社、大福谷の茶園を守り、次世代に継承していくとともに、湯屋谷地区全体の景観づくりについても検討していく。

４　景観を活かしたまちづくりへの展開に関する事項

□景観を活かしたまちづくり活動

［現状］
- 生家での歴史解説や茶の振る舞い。
- あじさいの季節には、野点でゆっくりお茶を楽しむことができる「あじさいまつり」を開催している。
- 新茶の季節には、永谷宗圓翁顕彰会により手摘み体験や簡単な製茶体験ができる「永谷宗円生家新茶まつり」が開催されている。
- 毎年大晦日から元旦にかけて手もみ製茶をして、新年にいち早く茶を味わう会を行っている。
- 湯屋谷集落から発祥地とされる茶園に続く道は、家康伊賀越えの道であり、その解説板を現地に設置している。

【新茶まつり】

［課題］
- 運営経費の捻出や来客対応の負担がかかる。

［景観を活かしたまちづくり活動のアイデアや方針］
- 日本緑茶発祥の地「湯屋谷」の魅力発信や宇治茶及び地域の魅力を体験していただく取組を進めることで、当地区を訪れる方を増やし、地域の活性化につなげていきたい。
- 行政（町）と協力しながら、宗円生家と町の茶栽培発祥の地とされる茶園（大福谷）への散策路整備を進める。

・現地が国道からいくつかの谷筋の奥にあるため、案内看板を設置し場所を分かりやすくする。
・茶もみ体験などより身近に永谷宗円の製茶を学べる取組や湯屋谷のお茶の普及を図る。
・地区外からの協力も呼びかけ、お茶を使った加工品やスイーツ作成など飲むお茶のみならず他分野との連携により新たな商品開発や地域の魅力を発信する取組を進める。

5　その他必要な事項

【湯屋谷区の概要】

・構 成 員　438名
・役　　員　区　長　谷村　和男
　　副区長　藤田　隆一
　　会　計　浅田　豊士